

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：17701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26880017

研究課題名(和文)映画・映像メディアに関する地域ネットワーク型アーカイブ学の基盤形成

研究課題名(英文)A Framework for Establishing Local Community Network-based Film Archives

## 研究代表者

中路 武士 (NAKAJI, Takeshi)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号：50736254

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現在様々な地域や大学で急務となっている映画・映像アーカイブの構築研究を、奄美群島を中心に数多くの離島を有し、本土最南端に位置する鹿児島県で実施したものである。南日本のヴァンキュラーな映像をデジタル・アーカイブし、そのメディア表象の批判的な分析を行った。鹿児島大学を拠点に、鹿児島コミュニティシネマやかごしまフィルムオフィスと連携し、また、様々な大学や研究機関と資料調査を協働して行い、多地域間での研究者のネットワークの基盤形成を試みた。そして、アーカイブ学の構築のために、映画論やメディア論などの基礎研究を進めながら、映像技術や表象様式に関する歴史的分析和理論的考察を行った。

研究成果の概要(英文)：This research project establishes the framework for a community-based film archive in Kagoshima, the southernmost prefecture of Japan's "mainland" that includes a large number of islands (ex. Amami Islands). The archive collates southern Japan's vernacular images and undertakes a critical analysis of the representations they provide. Based at Kagoshima University, the project develops a network of scholars involved in this research preserving and and undertakes a survey in cooperation with Kagoshima Community Cinema, Kagoshima Film Office and a number of other universities and institutions. By establishing the framework for building a film archive, the project also helps contribute to the advancement and development of research in the fields of cinema studies, media studies and area studies.

研究分野：映画論・メディア論

キーワード：映画 映像 地域 記録 記憶 メディア アーカイブ

## 1. 研究開始当初の背景

現在、様々な映像資料の消失や散逸が進行するなかで、二〇世紀の文化や社会、そこに生きていた人々の生活や風習、そして土地の風景の記録を文化資源として保存し、各地域の記録と記憶を未来へと繋げていくために、映画・映像メディアのアーカイブ研究は、国内的にみても国際的にみても、ますますその重要性を増してきている。また、地域映像を収集してデジタル化し、市民の共有材として保存し、公衆に向けて発信するとともに、大学や文化施設における教育研究で利用可能とする試みも、研究者の社会貢献の使命として喫緊の課題である。

研究代表者は映画論・メディア論を研究し、とくに映像テクノロジーのデジタル化による視覚的イメージの表象様式の変化、観客の受容環境の変化に焦点を合わせて分析を行い、技術とともに形成され変容する人間の知覚や記憶、そして近代の文化の構造を探求してきた。しかしながら、映画や映像メディアの批判的考察を進める傍らで、過去の痕跡が徐々に失われていく状況に危機感を抱き、映像をデジタル化して収集・保存し、市民で記録を広く分有し、未来への文化遺産として伝える必要性を実感し、これまで NHK アーカイブスや NHK 放送文化研究所、一般社団法人放送人の会等とのアーカイブ構築研究を実践的に展開してきた。そして、地域映像アーカイブに関する国内各地域のシンポジウムやワークショップに積極的に参加し、たとえば北海道夕張市の「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭 2009」では「ゆうばりアーカイブ」の主催者の一人として、地域映像の調査と公開を実施した。

また、研究代表者はこれまで、2007 年度～2008 年度に科研費助成事業(特別研究員奨励費・DC2)「現代的アメリカ映画の視覚的様式分析—表象技術と文化形態に関するイメージ論的研究」を実施し、映画的イメージを運動と時間の「技術的エクリチュール(文字)」として捉え、その痕跡が形成する記憶の保存体系を「視覚アーカイブ」として分析するという、独自のアーカイブ学を立ち上げ、映画フィルム・映像メディアの技術に関する新たな理論的考察の開拓に努めてきた。さらに、映像分析や注釈付与・共有に際しては、映像解析ソフトや SNS システム等のデジタル・テクノロジーを「批判＝批評の道具」として活用するという独自の方法論を打ち立ててきた。このように情報工学的知見を組み入れた人文学的方法からの映画論・メディア論の研究は、世界的にもまだ始まったばかりの新しいものであり、文化資源の保存、分析、公開を展開する「デジタル・ヒューマニティーズ(人文情報学)」の勃興という国際的潮流のなかでも、これからその一翼を担うと注目され期待されているものである。

このように、研究代表者は、映画・映像のアーカイブ構築の「実践」と、その学術的基盤となるアーカイブ分析の「理論」を往還しながら、デジタル・テクノロジーを駆使して、映画論とメディア論の研究を行ってきた。

そして、2014 年度より鹿児島大学に准教授として着任するにあたって、これまでの研究成果を踏まえ、それを発展させるために、映画・映像メディアと表象技術に関する理論的な研究を引き続き実施するとともに、奄美群島をはじめとした島嶼地域を含む鹿児島において、デジタル・アーカイブ構築研究を実践的に推進していきたいと考えた。鹿児島には地域映像アーカイブを構築していく組織的基盤がまだ存在しないため、鹿児島大学を拠点として、鹿児島コミュニティシネマやかごしまフィルムオフィスと協働しつつ、地域と連携した映像の収集や保存、公開、研究を実施する必要がある。そのため、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターおよび総合研究博物館と共同して、研究者同士の人的ネットワークを構築し、鹿児島本土や奄美群島のヴァンキュラーな映像文化に関して、そのメディア表象の批判的な分析を行っていく研究を開始することにした。

## 2. 研究の目的

映画・映像アーカイブの構築研究を、奄美大島などの島嶼地域をふくむ鹿児島県で実施するとともに、映画理論や映像人類学、文化社会学やメディア論・メディア史などの領域を横断しながら、映像技術や表象様式に関する歴史的・理論的な分析と考察を多角的に行う。また、鹿児島大学を中心に、地域と連携するだけでなく、様々な大学や研究機関と資料調査を協働して行い、多地域間での人的ネットワークの基盤形成を試みる。とくに、2013 年は奄美群島の本土復帰 60 周年、2015 年は戦後日本 70 周年という機会であるため、研究活動のスタートとして、戦後から現在までの奄美群島の映像アーカイブ分析、そして映画技術と記録・記憶に関する批判的考察を実施することを本研究の目的とする。

鹿児島および島嶼地域の映画・映像アーカイブ構築研究は、本研究が国内ではおそらく初めての試みであり、国内のみならず国外の学術研究にも資するところが大きい。また、アーカイブを地域に限定するのではなく、研究者の人的ネットワークを活用して形成していくところ、そして戦後の鹿児島の映像文化に着目するところが、本研究の独創的な点であると言える。さらに、アーカイブ構築の実践だけではなく、それを批判的に捉え返し、映画・映像文化とメディア技術に関する新たな理論を打ち立てようとするところに学術的な特色がある。

本土最南端に位置し、数多くの離島を擁する鹿児島県の歴史的・地理的条件を活かしながら、鹿児島大学を拠点とし、鹿児島コミュニティシネマやかごしまフィルムオフィス、学内の国際島嶼教育研究センターや総合博物館と協働するので、グローバルな視点からヴァナキュラーな文化を捉え返すことができる。さらに、地域と連携することによって、映像を媒介にした地域振興への提言、地域コミュニケーションの環境創出にも寄与できるものとする。本研究は、そのための研究基盤の形成を目指すものである。

### 3. 研究の方法

映画論・メディア論の基礎である理論研究は、とくにデジタル・テクノロジーとデジタル・アーカイブの問題系に焦点を合わせて長期的に継続してゆき、著書および論文のかたちで発表していくが、まずはそれと並行して実施する調査活動として、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターおよび総合研究博物館の協力のもと、奄美群島を中心とした島嶼地域と鹿児島本土の映像資料の調査と収集に取り掛かる。

とくに高温多湿という気象的条件のため記録映像が少ないと考えられる奄美群島の映像調査を重点的に展開する。これまでの映画研究においては、奄美関連の映画・映像論が皆無であるからだ。具体的には、奄美群島広域事務組合視聴覚ライブラリーをはじめ、鹿児島県立奄美図書館や南海日日新聞、奄美市歴史民俗博物館、あまみエフエム等と連携し、地域住民に広く呼びかけて、地域映像資料の収集を図る。なお、ヴァナキュラーな映像文化の位相を明らかにするために、巡回映画や移動映画といった離島独特のメディア文化にも目を向け、映画・映像関係者のインタビュー調査にも取り組む。

そして鹿児島大学を拠点として、記録映像が発見された場合には、収集した映画・映像のデジタル・アーカイブ化を試みる。そのために映像機器等の研究環境を整備するとともに、フィルムは株式会社東京光音にてデジタル化する。デジタル・アーカイブ化したヴァナキュラーな映画・映像は、映画論・メディア論の知見をもとに、デジタル・テクノロジーを活用して、表象分析を実施する。

それと並行して、研究者の人的ネットワークの拡充を行う。アーカイブ拠点が国内各地に分散しているだけでは、文化資源へのアクセス、比較文化研究にとって妨げにもなりかねないからだ。その問題を解決し、様々な地域の研究者や一般市民の利用に供するために、多地域の研究拠点とアーカイブのネットワーク化を目指す。また、地域研究やアーカイブ学に関する学会や研究会に参加することで、学術交流を行う。

さらに、鹿児島コミュニティシネマやかごしまフィルムオフィス、鹿児島のローカルテレビ局との地域連携を展開するための研究基盤を整える。そしてさらに、記録映画の制作に携わっている映画作家を鹿児島に招聘して市民と議論する機会を設け、アクチュアルなアーカイブ活動の実相を紐解くことによって、地域と映画の相関関係について考察していく。

## 4. 研究成果

### 4-1. 映画論・メディア論の理論研究

映画・映像メディアに関する地域ネットワーク型アーカイブ学の基盤形成のために、その基礎理論となる視覚的イメージのデジタル化をめぐる理論的考察を行った。とくにモバイル・メディアによる映画の表象と受容形態の変化、デジタル化によるアーカイブの位相の変化について、映画史のなかに位置づけながら分析し、デジタル・イメージに関する新たな知見を導き出した。この論考は本研究が調査対象とする小型映画やアマチュア映画の表象分析のモデルとなる（「5. 主な発表論文等」5-1-1、5-3-2）。

また、蓮實重彦、フリードリヒ・キットラ、ベルナルド・スティグレル、バーバラ・マリア・スタフォード、マーク・ハンセン、N・キャサリン・ヘイルズ、藤幡正樹など、現在のメディア論を国際的に第一線で牽引する論者たちのディスカッションを纏め上げ、イメージやアーカイブ、メディアやアートのデジタル転回について批判的に考察した（5-3-1）。

これらは、国際的な査読学術雑誌、および学術論文の論集として書籍の形で出版し、その研究成果を公開した。

さらに、記録と記憶を伝えるメディアとしての映画に関して、表象可能性／表象不可能性とカタストロフィとの関係から分析する国際研究発表を高麗大学校で行う——発表原稿は現在韓国で出版準備中である——とともに（5-2-1）、本研究主催で国際ワークショップを開催し、表象とメディア、アーカイブの概念そのものをめぐる論考の研究発表を実施した（5-2-2）。そして、記録と記憶、映画とアーカイブの構造をめぐっては、ジル・ドゥルーズとミシェル・フーコーの哲学に依拠しながら、その思考をデジタル・メディア環境に接続する試みを鹿児島大学人文科学部の紀要論文に著した（5-1-2）。

### 4-2. 記録映像の調査

上記の理論的研究と並行して、鹿児島本土および奄美群島において、記録映像の調査を実践的に行った。とくに奄美大島においては、奄美群島広域事務組合視聴覚ライブラリー、

鹿児島県立奄美図書館、南海日日新聞、奄美市歴史民俗博物館、あまみエフエム、鹿児島県立奄美高等学校等と連携して、地域住民に広く呼びかけた。あまみエフエムに出演したり、南海日日新聞に記録映像を募る記事を寄稿したりすることで（5-4-1）、本研究への地域住民の認識度を向上させることができたと考えられる。

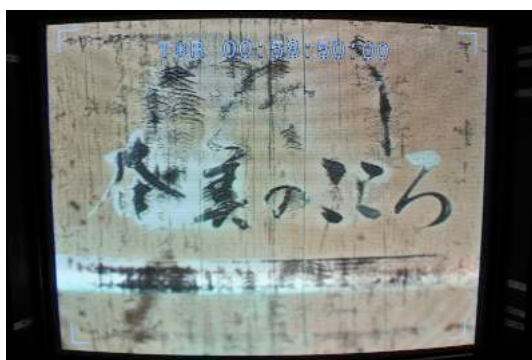
また、国立国会図書館や東京国立近代美術館フィルムセンター図書室などで鹿児島や奄美群島の映像文化をめぐる資料を調査するとともに、奄美大島を中心とした島嶼地域に足繁く通り、様々な人々にインタビュー調査を実施した。

しかしながら、高温多湿によるフィルムの劣化、世代替わりによるフィルムの廃棄のため、一般の市井の住民が撮影した戦後の8mmフィルムや9.5mmフィルムを発見するには至らなかった。だが、本研究の映像調査において、戦中・終戦直後に米軍によって記録され、ワシントン国立公文書館に所蔵されていた奄美群島の写真と8mmフィルムが鹿児島県立奄美高等学校によって収集されていたこと、そして奄美群島の日本復帰に関する数多くの記録写真が奄美群島広域事務組合視聴覚ライブラリーに保存されていることなどが明らかになった。

さらに、本研究による調査では、すでに失われていたと思われていた名瀬市制30周年記念映画『奄美のころ』（名瀬市・毎日映画社）のフィルムの所在を発見することができた。そのほか、奄美群島復帰記念の周年事業の記録映像などの存在も明らかになることができた。

#### 4-3. 記録映像の収集とデジタル化

奄美大島の奄美市で株式会社楠田書店を経営している楠田哲久氏の協力を仰ぎ、『奄美のころ』の映画フィルムをはじめ、復帰記念の記録映像のVHSなどを収集した。そして、それらの映像を、株式会社東京光音でデジタル修復・復元することにした。しかしながら、復帰記念の記録映像のデジタル修復・復元は成功したもの、高温多湿という気候による『奄美のころ』のフィルムの劣化は著しく、デジタル修復・復元は困難を極め、鑑賞・分析に耐えうるアーカイブを構築することはできなかった。



（『奄美のころ』のデジタル修復の試み）



しかしながら、少なからず音響的側面の修復と復元をすることはできたので、徳之島に個人蔵として保管されている本作の台本をもとに、今後の研究において、これらのヴァナキュラーな表象を分析していく方針である。本研究ではそこまで進捗できなかったものの、その成果は、学会や研究会などで公開していくつもりである。

#### 4-4. 地域ネットワーク型アーカイブ学の展開

様々な地域におけるアーカイブ構築研究の人的ネットワークを構築するために、京都市立芸術大学芸術資源研究センターのアーカイブ研究会や、神戸大学・神戸映画資料館の公開研究会「映像アーカイブと地域連携」などに積極的に参加し、最新のアーカイブ学の知見に触れ、専門家によるアドバイスを受けた。

また、鹿児島コミュニティシネマやかごしまフィルムオフィスと連携して、鹿児島の各地域の映像調査を進めるとともに、記録映画・映像アーカイブをめぐる対話型シンポジウムを研究者や学生と地域住民に向けて開催した。

その対話型シンポジウムでは、地域と映画、記録と記憶を考えるために、東日本大震災後に展開された様々な映像アーカイブ事業を参考とすべく、東北地方の人々の記憶と証言をテーマとした記録映画を上映し、監督と議論を2回行った。

具体的には、美術家・映画監督で、地域映像アーカイブを使用した作品を発表している藤井光氏を鹿児島市と薩摩川内市に招聘して、閉館した地域の映画館と人々の記憶をめぐる記録映画『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』（2013）を上映し、人々の記憶をめぐるディスカッションを実施した（5-4-2、5-4-3）。また、『なみのおと』『なみのこえ 新地町／気仙沼』『うたうひと』の「東北記録映画三部作」（2011～2013）の映画監督である濱口竜介氏と、土地の記録や証言の伝承をめぐるディスカッションを実施した（5-4-4）。そして、地域と連携したアーカイブ構築研究について、記録映画の制作者という立場から、それぞれ貴重な見解を伺うことができた。



（地域連携型・対話型シンポジウム）

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

##### 〔雑誌論文〕（計2件）

5-1-1. Takeshi NAKAJI, *Cinema in the Mobile Age: Digital Technology and the Transformation of Audio-Visual Environment*, “EPISTÈMÈ 에피스테메 (Body, Image, Media)”, Refereed Article, Center for Applied Cultural Sciences, Korea University, No.11, June 2014, pp.163-183. (Peer-reviewed)

5-1-2. 中路武士「映画的思考と技術——視聴覚的アーカイブの読解可能性について」、『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』第83号、2016年2月、9-21頁（査読なし）

##### 〔学会発表〕（計5件）

5-2-1. 中路武士「키테트로피와 영화——기억의 문제와 관련하여 (カタルストロフィと映画——記憶の問題系をめぐる)」、『재해와 일경하는 학지: 글로벌 시대의 동아시아적 시각 (「災害」と越境知——グローバル化する東アジアで考える)』、研究発表、高麗大学日本研究センター・鹿児島大学共同国際学術大会、韓国ソウル：高麗大学校、2014年11月14日

5-2-2. 中路武士「アーカイブの概念について」、『アーカイブと自己表象』、主催：科学研究費補助金「映画・映像メディアに関する地域ネットワーク型アーカイブ学の基盤形成」（研究活動スタート支援）（研究代表者：中路武士）（研究課題番号：26880017）、鹿児島：鹿児島大学、2015年9月2日。

##### 〔図書〕（計2件）

5-3-1. 石田英敬＋吉見俊哉＋マイク・フェーストーン編『デジタル・スタディーズ1 メディア哲学』（東京大学出版会、2015年7月、

研究代表者分筆担当)

中路武士「眼と耳／映像と音——フリードリヒ・キットラー×蓮實重彦」(57 - 63 頁)

中路武士「注意の危機——ベルナール・ステイグレル×バーバラ・マリア・スタフォード」(119 - 125 頁)

中路武士「RFIDとメディアアート——マーク・ハンセン×N・キャサリン・ヘイルズ×藤幡正樹」(231 - 238 頁)

5-3-2. 石田英敬+吉見俊哉+マイク・フェザーストーン編『デジタル・スタディーズ2 メディア表象』(東京大学出版会、2015年9月、研究代表者分筆担当)

中路武士「映画テクノロジーの新しい文字——モバイル・メディアとデジタル・イメージ」(45 - 65 頁)

デイブ・ブースロイド(中路武士・谷島貫太訳)「触覚、時間、技術——レヴィナス、または触覚的コミュニケーションの倫理」(157 - 182 頁)

ネヴェナ・イヴァノヴァ(中路武士訳)「経験変容としての瞑想イメージ——ビル・ヴィオラのビデオ・アート分析」(233 - 255 頁)

#### 〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

#### 〔その他〕

#### (新聞記事1件)

5-4-1. 中路武士「地域映像アーカイブ構築へ——メディア環境の保全」『南海日日新聞』、第7面、2016年2月19日

#### (地域連携型・対話型シンポジウム4件)

5-4-2. 藤井光・中路武士『『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』連続上映会+トーク・ディスカッション(1)』、主催:科学研究費補助金「映画・映像メディアに関する地域ネットワーク型アーカイブ学の基盤形成」(研究活動スタート支援)(研究代表者:中路武士)(研究課題番号:26880017)、鹿児島:鹿児島大学、2015年5月9日

5-4-3. 藤井光・中路武士『『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』連続上映会+トーク・ディスカッション(2)』、主催:科学研究費補助金「映画・映像メディアに関する地域ネットワーク型アーカイブ学の基盤形成」(研究活動スタート支援)(研究代表者:中路武士)(研究課題番号:26880017)、鹿児島:川内まごころ文学館、2015年5月10日

5-4-4. 中路武士・濱口竜介「『東北記録映画三部作』連続上映会+トーク・ディスカッション」、主催:科学研究費補助金「映画・映像メディアに関する地域ネットワーク型アーカイブ学の基盤形成」(研究活動スタート支援)(研究代表者:中路武士)(研究課題番号:26880017)、鹿児島:鹿児島大学、2016年3月10日

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中路 武士 (NAKAJI, Takeshi)

鹿児島大学・学術研究院・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号:50736254

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし